

マ ラ ヤ の 村 の 自 治

—Kubang Siam について—

築 島 謙 三

Self-Government in a Malayan Village

by

Kenzo TSUKISHIMA

1 はじめに

マレー人だけが住んでいる村の自治形式はどういうものであるか、それをささえている精神としてどのようなものが見られるのか。以下は、その問題を Kedah 州の一農村 Kubang Siam についてみたその結果の報告である。

一定の地域住民の生活秩序を保つ方法は、きびしく整序された法治国家においては、村といえども、法の網によっているといえるほど、政府の干渉が密である。われわれの国におけるように、村に役場がおかれ、多数の吏員によって多くの職務が分担されている事実がそのことを示している。まだそのようではないであろう新興独立国の村においては、その点はどうか。筆者が現地に入るにあたって頭にあった問題のひとつはこれであった。それは、大は建国の活動から、小は村住民の生活にいたるまで、そこに旧と新つまり伝統と近代性のはり合う姿が見られるであろうから、その局面を観察することによって、むしろ、かれらをなお強く制約しているであろう伝統の側面をとらえてみたいという問題に包摂されるひとつの問題であった。

以上のように、短いながらそれとして完結するこの報告論文について筆者の意図したところを記しておいて、本論にうつることにしよう。調査期間は1964年11月はじめから翌65年1月末にいたる3カ月間であり、以下の記述においては1965年現在とする。この調査研究を可能にして頂きたいまは亡き棚瀬襄爾博士と村の方々および関連してご親切を頂いた口羽益生・前田成文の両氏にここにあらためて御礼を申しのべたい。

2 村の概況

ケダー州には日本の郡にあたるアラビア語由来の daerah が10あり、調査村は Daerah Kota

Star にある。この daerah の中には mukim と称する地区が 40 ある。mukim は元来ひとつの回教寺院 (mosque) を中心とした教区を意味するこれも アラビア語であるが、ここではそのような宗教的な意味をもたない、単なる行政上の地区である。日本の行政村にあたる感じである。その中に含まれる kampong は最小の地域社会であるが、多くの場合、これを部落というにはあまりに大きい。それで kampong を村といい、mukim の方は地区と呼ぶのが適当であろう。1870年前後のマラヤ中部諸王国について Gullick がのべた中には、こんにち mukim の長を指す penghulu は kampong の長のことであって、mukim なる地区のことは記されていない。kampong の上の地域名称としては daerah があるばかりである。

daerah が日本の郡にあたると上に記したけれども、しかし日本の郡とはちがひ、明確な行政上の単位地域をなし、行政官吏がいる。mukim の長は penghulu といい、daerah 長の監督下にあり一定の給料をうけている。ただし任期はきまった期限はない。その執務の場所はかれの私宅であって、役場はなく、かれ以外の一定の職員もない。そのことは、mukim が一定の行政地域として上位自治体につながる面がうすいということである。少なくとも現在は、penghulu 一人が mukim 内の公的職務を遂行することで間に合っている。

調査村 Kubang Siam が所在する mukim は Padang Lalang といい、また同 mukim 内には同名の kampong がある。この村は、こんにちの mukim の中心地である Alor Janggus のその中心地としての出現以前には、この地一帯の中心となっていたのではないかと想像される。Alor Janggus は Kedah 州の首都 Alor Star からこの mukim に向かう唯一のバス経路の終着点である。バスが通い出したのは 3, 4 年前であるが、それまでは Alor Star との交通は大體舟によっていて、その発着地も Alor Janggus にあった。そしてそこには、現在中国人商店が軒をつらねて日常用品を売り、マレー人相手の稲米の買付や金融をも営んでいる。警察署があり、診療所があり、あきらかにそれとわかる美しい構えの Penghulu の住居もここにある。

こうして Alor Janggus は Mukim Padang Lalang の中心地である。この村の両隣りは一

-
- 1) J. M. Gullick, *Indigenous Political Systems of Western Malaya*, 1958, pp. 21—22. もっとも Gullick は現代の Penghulu は mukim の長であることを記している (P.36)。いつ、どのようにして penghulu が mukim の長に格上げされたのか、それとも在来の penghulu は ketua kampong と改称され、そのまま村の長としてとどまったのかも知れないが、それらについてはともかく、こんにち Kelantan 州には daerah の上に jajahan があることからすると、州により行政区分の仕方に差があるのかも知れない。なお mukim は日本の行政村にあたるというきれいなのは、上記のことに加えて、mukim 内の複数 kampong 間の結びつきが浅いと見られることである。つまり mukim としての一体性は日本の行政村のようなものではないのである。それから付記しておきたいのは、Kedah 州では daerah が district, その長は district officer と英訳され、Kelantan 州では jajahan が district であり、daerah の長は penggawa と呼ばれる。(以上 Kelantan 州については次の現地報告による。長井信一「マラヤ連邦東海岸調査旅行記」、『アジア経済』1962, 3巻5号, 104~107)。

方が Padang Lalang 村であり、他方が Kubang Siam 村である。この3村を直線的な川が貫流している。Alor Janggus は他に比較して新しいと思われた。というのは、故老の語るところによると両隣の村は相接しているのである。あたかも Alor Janggus の存在は眼中にないかのように上記2村の境界を説明する村の人のことばをききながら、筆者にはそのように思われた。「あれは中国人の場所だ」という人もあったのである。つまり、わりあい家数の多いこの2村の中間地域に中国人商人が移住してきて次第に繁昌していくその特異な地域を別個の名称で呼ぶようになり、それが一般化したであろうということであった。²⁾70才くらいの老人が次のように語ったこともあったのである。「自分が子供のときには中国人の商店は2軒だけでした。本国から直接着いたと思います。弁髪をしていました。食料品店でした。川の交通はまだなく、陸の交通も不便でしたから、われわれマレー人は喜んだものです。」

Alor Janggus の生みの親は中国人であったと誤りではない。商いを通して都会的なものを移入し、精米所をつくり、最近ではテレビ鑑賞室を設けるなど、かれら中国人は、収益のためはなはだ活動的であり、企業面で流動的である。しかし、隣接村のマレー人は、伝統的な生産と生産様式を中心にして、長い年月にわたって大きな変貌があったとは思えない静かな生活を営んでいる。

Kubang Siam は川の兩岸に約1,830mにわたって建ち並ぶ157戸からなる村である。川にかかる橋の数が四つ、末端の橋から村を見渡しても家の姿はあまり見えないほど、家々のまわりに椰子やバナナの木が生い茂っている。西北端は Simpan Empat という村がつづき、そこにも中国人の商店の幾軒かが群をなしていた。Alor Janggus の中国人商店地区よりは規模が小さく、静まり返っているという風で、おそらく比較的新しいのであろう。Kubang Siam の住民の一部はそこへ買物に行く。東南から西北に伸びたこの村の西から南の方向には広大な水田が開け、遠く彼方に同じ mukim に属する村々が見える。主なものが大体10内外であるが、中でも知られた富裕な村は Kubang Jawi で、そのモスクは Kubang Siam のものよりは、はるかにりっぱである。反対側の北から東にかけても同じく水田で、村の背後近くではタイ国に

2) 果してその名称が中国人来住後にその地区に付されたのか、その以前からあったのか、それは不明であるが、マレー人にとってそこが kampong として他の村と同列視されるものでないこと、しかし、便宜上の名称として一般化していることは否めない。家並の具合からその地区の一端は明確であるが、他端（西北の）の境界があいまいであるのはそういうことによるのであろう。中国人が一旦 Kubang Siam に住んで、それから現在地点にかたまつたということを前田清茂氏があきらかにされたが*、Kubang Siam のちょうど中央部に現在中国人の住む古びた1軒家がある。そのあたりがかれらの最初の居住地だったのかも知れない。Alor Janggus と呼ばれる地域にもマレー人の家があるが、かれらが中国人といっしょにされることはなく、何か必要あるときには Kubang Siam Satu (後出) にはいる。Padang Lalang 村の隣り村に住む中国人までが Alor Janggus のこの中国人自治体に属しているというから**、マレー人と中国人が一つの自治体をなすことはまずないことがうかがわれる。(* 前田清茂「マラヤ北西部における中国人集落の構造・上」、『東南アジア研究』3巻5号, pp. 72—93 ; ** 口羽・坪内・前田「マラヤ北西部の稲作農村」、『東南アジア研究』3巻1号, pp. 22—51)

のびる新国道の建設が行なわれ、完成が近かった。

この村は三つに区分されている。第1クバンシラム (K. Siam satu), 第2クバンシラム (K. Siam dua), 第3クバンシラム (K. Siam tiga) という。それぞれ71戸, 56戸, 30戸である。K. Siam satu には Alor Janggus 側のマレー人も含まれる。mukim の長である Penghulu は K. Siam satu に住んでいる。副 Penghulu にあたる Panglima は K. Siam tiga に住居がある。それでいきおいその地域の長 (ketua) は2人が代行している形で、別に他に長はいない。K. Siam dua は、後にのべる相互扶助会 (Sharikat Pinggan Mangkok) の世話人が有力有志でもあり、その人が長格である。正式に ketua とは呼ばれない。Pengkulu, Panglima が居住する村であるから自ずと他に長をおく必要がなく、はっきりした ketua はいないのであろう。自分がそれだと自称したり、それを他の人が否定したりすることもある。K. Siam 全体についても正式の ketua kampong はいない。他の村では一定の ketua kampong がいて、mukim 内の全 ketua kampong の集りも年一度はあるようであるが、そのさいは K. Siam は適当に有力有志の1人がそれとして出席するらしいである。

3 Ketua Kampong としての Penghulu

Pengkulu は州の Sultan の承認をうけてその任に就くのであるが (Panglima もそうであったように記憶する)、その前に村民の推挙が必要である⁴⁾。財産があり有能である村の最高の有志が Penghulu に推されるが、政府から給料をうけている唯一人の行政官であるだけにその権力は強く、権威は高く、その点は日本の村長とはかなりのちがいがあ⁵⁾る。

ketua kampong は、日本でいえば部落ごとの区長にほぼあたるといえる。日本の区長は大体役場と部落との間の連絡員であり、部落内のまとめ役である。その任に適当な部落内有志が推されてなるいわば準公吏である。行政区 mukim には役場・職員・議員がないのであるから、ketua kampong が日本の区長とまったく同じであるはずはないが、大体対応している。しかし、上記したような権力の強い Penghulu の協力者としてのこの ketua は、したがって、日本の区長よりは権威高く見られているようである。日本の軍政下にあった当時の ketua が現在も自分はそうだといっている、ときいた他の有志の人たちがそれを否定する仕方において

- 3) ある人は区分は二つ、他の人は四つということもあり、三つの区分をたしかとするのに手間がかかった。ということは一般住民にとって区分の意義が生活の上でうすいということである。Alor Janggus, K. Siam 各々の片方の境界を確認するにも同様のことがあったが、それも同じことを意味していると思われる。
- 4) Panglima の方は Penghulu 個人が選んで、村人の承認を求めるとい形をとる。後者は55才のとき一応辞職の伺いを立てる慣例があるが、通例無期限である。
- 5) 法律による一定数の議員があり、議会政治が行なわれている日本の村の村長と、そうではないマラヤの現在の penghulu mukim との間には同列には考えられないものがあるけれども、のちに見るように penghulu にも ketua kampong という相談相手があるのであるから、そこに議会政治の萌芽的なものは認められるのである。

もそのような感じをうけた。mukim は相当に広い地域であり、Penghulu の選挙のさい候補者は出身村以外の村では左程には知られていないであろうから、そこでこの選挙に世話役をつとめる ketua kampong の立場は重要になってくる。

こうして mukim では、行政の上で Penghulu と ketua kampong は表立った治者の立場にあるといえる。しかし、Penghulu の権力は他との比較を絶して大きい。管轄域内の問題は何事もかれを中心にとりあつかわれている。Penghulu とその協力者の ketua kampong が自治体 mukim を対象とした治者の立場にあると記したけれども、真に mukim 全体を視野の中にいれているのは Penghulu ただ1人であるという過言ではない。ketua のかれに対する協力はその住む kampong に関するることにかぎられている。かれを長にして ketua kampong らがひとつの会議体を成しておくほどの mukim 全体にかかわる問題はないのである。つまり、行政単位としてこの mukim の役割はまだそんなに大きくはない。したがって、その機能の細分化が見られない。役場を設置するにいたってないのはそのためである。

K. Siam は細長く戸数が多く、それで3区に分ける必要が出てきて、上記したように3人の ketua があるという形になったのである。村内にひとつあるモスクが古びて再建の必要にせまられている現在、そのための資金として村民に拠金を求めることになり、その集金には村が3区に区分されている方が便利である⁶⁾とか、上記相互扶助会がそれぞれの区にあたる地域に存在しているとかいうことがあり、実際村全体に関連する事務の遂行のためには三つに区分されているのが便利なのである。それでそのような区分ができたにちがいない。そしてそれぞれに ketua 格の人がいるのである。その内の1人は Penghulu であった。しかしながら、所詮、K. Siam 村全体の ketua は Penghulu が兼任していると見る方が正しい。3区分になっているというから、それならそれぞれの ketua は誰かときいた結果、強いていえば上記したような3人だということになったのであって、誰もがきかれて即答できるほど知られたことではなかった。しかし、まったく否定はできないことは上述したことからあきらかである。そういうことは認めながらも、実質的にはいま K. Siam の ketua は Penghulu であるということができよう。

村の宗教的側面の最高位者は Imam であるが、そうでない secular な側面における最高位者は Penghulu であって、有力有志の幾人かが相談役としてかれをとりまいており、その点で村においても貴族主義的雰団気は流れているのである。それら有力有志がわりあい formal な姿ではっきり現われている場所はすでに言及した相互扶助会なる組織体である。

6) その集金担当者は上記相互扶助会の世話人であった。1 relong (約2反5畝)につき8 gantang(約2斗)相当の金額という拠金の率であり、富裕な家は応分の寄付をするということで、5年以内に再建完了という案を立てていたのであるが、Penghulu の努力により政府が全額を出すことになってこの案はさたやみになったのである。

これは慶弔両事に役立つための互助会である。調理用道具一式、食器類、床板などを買い求め、原則的にはその世話人の屋敷内に小屋を建てて、その中にそれら物品をしまっている。Pinggan は英語の plate, mangkok は bowl にあたり、要するに両語で瀬戸物類ないし食器類のことである。それぞれの会に規約ができあがっているが、ここで K. Siam satu にある会のものを掲げてみる。

役 員

- 1 顧 問
- 2 饗 応 係
- 3 会 長
- 4 幹 事
- 5 会 計 係
- 6 監 事

守るべき事項

- 1 入会費は10ドルとする。
- 2 饗応を催す家はその旨饗応係に連絡する。
- 3 道具使用の都度10ドル納入する。ただし50点以下の場合はその要はない。
- 4 道具は使用后3日以内に返却する。損傷をあたえた場合は1週間以内に補償する。幹事の立ち合いを便ならしめるため両者の実施は朝がのぞましい。もし道具の紛失あるいは詐欺が発覚した場合は総会を開き、当該会員に対する何らかの処置を講ずる。
- 5 饗応が終わったときは幹事は役員会開催の手続きをとる。
- 6 協力的でないとか、1年経っても所定の料金を納入しない会員は除名される。
- 7 床板のみの使用を希望する場合も、使用前に10ドルを納入する。第1条記載の10ドルは毎年納入のこと。
- 8 会員は床板使用の場合は保証金10ドルを預ける。
- 9 道具使用を希望する非会員は100点に対し事前に10ドルを納入する。同時に10ドルの保証金を預ける。

以上のとおりである。これは最近きまった新幹事を中心に開いた第1回委員会の際の草案で、まだよく整理されていないようである。しかしこれをもってこの会の内容はうかがい知られよう。前幹事の手落ちに対する不満が契機になって規約改正が行なわれたもので、実質中心になって世話する幹事は大いに若返った。他の二つの会は有力有志が責任ある世話人で、1人は30年、他は10余年にわたりその任にある。上記規約を持つ会の方も、最近までつとめていた世話人は、年取った最高有志の1人であった。「この会の長が K. Siam の3地区各々の ketua といってよい」という人があったほどである。上記したように実際はそうではないが、そうい

う発言があったこと自体は注目してよいであろう。最有力の人がその会の長になるものという暗々の気持が表明されたとみてよいからである。このことからこの互助会の村内における役割の重大さが推察されるが、村生活に結びついて長い伝統をもったこの組織は、ただに饗応を便ならしめるという経済面のひとつの機能を果たすだけにとどまるのではないと考えられる。というのは、この村には古くからある組織というのは、この会とあとでのべる Orang Sapuloh のほかはないとあってよいからである。

現在ある組織をあげるとすれば、まず、農民組合 (Persatuan Peladang) がある。これは政府が役人を村内に派してつくりあげたもので、1964年8月に発足したばかりである。この結成によって村人は米の売価や売り先の問題、政府ザカットの⁷⁾問題などをとりあつかえることになるのかとただすと、とんでもないという表情をして「組合はそういうことにはふれない。組合があつかうのは肥料購入とか農業技術の問題だ」と答えるのであった。中国人商人のいうままの値段で米を売り、その道以外に米を売ることのできない状態につよい不満は表明するけれども、その問題の解決を組合活動に期待はしない。

文盲追放のための成人学級 (adult class) がある。1960年から農村振興政策の一環としてはじめた政府の事業である。現在生徒数は25人、20才から30才代の婦人で、最若年が16才、最年長45才である。来るべきと思われる婦人の80%は来ている。教師は当村小学校の女教師1人が担当し、読み・書き・算数および宗教が学科目である。日曜、月曜、火曜の週3度の授業一午前8時半～9時半一、日曜日だけはさらに1時間家政を教える。年限は3年、この村ではまだ卒業生は出していない。この学校は、相当の成績をあげているというので村人の間では好評である。

別に女子青年あるいは若い主婦のための料理講習会が毎金曜日小学校で行なわれている。男女とも青年会はない。1957年のマラヤ連邦の独立を祝う Alor Star の祭典にはじめて青年が団体として参加したさい、恒常的な青年会があった方がよいという話が出たことがあったが、未だにそれはない。現在その結成を意図して話合っている段階である。そのイニシアティブを小学校教師がとっている。

マラヤには唐手に似たブルシラという競技があるが、この村にはそれをたのしむ青年の小団体がひとつある。最近まで他にひとつあったが、3カ月ほどつづいただけで解散してしまった。20人程度で、毎回20セント出し合い茶菓代と師匠への謝礼としている。他団体と試合をす

-
- 7) 隣村の Padang Lalang ではそれより早く結成されている。その準備のため10人がクアラルンプールに送られ講習をうけた。しかし、ここでは発足がおくれ、講習に行くこともなかった。村民の発意によるのではなく、役人の指導のもとにつくられた組織である。「そのような組織結成も村人が思い立つことはないし、村人だけでつくれるものではない」と語る村人があった。
- 8) 10 relong に付き 3 kuncha (約120斗) の割で政府に納める米を、村内での伝統的ザカットに対し、政府ザカットと呼んでおく。ザカットは本来自発的宗教的意味のものであるとして、村人は一般に政府ザカットには不満である。

ることではない。結婚の祝宴の座で余興として披露することがある。

自警団があって夜間警備にあたっている。インドネシアとの紛争が激化したため、ごく最近つくられた団体である。日本の軍政時代に同じものがあつたのだという。18才以上の男子100人から成り、夜7時から朝6時にいたる間交替で任につく自発的参加による集団である。

以上の組織体はすべて新しいものである。その点でそれらと上記の相互扶助会とは顕著な対照をなしている。後者はその起源があきらかにきれ得ないほど古く、そして村の有力有志がみなそれに結びついているという全村的組織なのである。そのような組織は他にはない。農民組合が今後発展し安定してくると、これと同類のものとして村の重要組織になるのであろうが、いまは緒についたばかりである。

元来この村は、マラヤの村が一般にそうであるかは知らないが、住民全体が共同に催す行事というものはモスクへの礼拝以外にはほとんどない。その礼拝も男子のみである。共同で橋をつくるとか、火事にあつた家を皆で助けるとか、あるいは収穫時に協同するとかという住民内の部分的寄り合いはあるけれども、全村的行事がないのである。日本の村では祭り、運動会、演芸会などの全村的賑わいの中で皆が顔を合わせることがあるが、K. Siam ではそういうことがない。断食の月あけの Hari Raya (われわれにおける元日にあたるほどの日)にも全村こぞって祝うという雰囲気はない。せいぜい近親間あるいは局地的に人々が集うのを見るだけで、住民全部が集合してお祭り騒ぎになるなどということはない。「“村の名を汚すようなことをするな”というか」という問いをかけたときに、56,7才の村の有志も、青年も、ピンとこないらしいので、日本の村八分のことを語ってきかせたことがあつた。そのとき「ここにもある」といって次のようなことを語ってくれたのである。「隣り村の Sematang で1人あつた。そういうときには Penghulu と Imam などが連署して警察にとどけて処置してもらいます。この例は1958年のことでした。」これは、村人からじわりじわりいびりだされることをいう村八分の例ではあるまい。村八分はかれらには分らないのである。かれらにあつてはわが村という意識は微弱であるようだ。村意識という点でかれらと日本の村住民とはよほどちがっているといえよう。

そのような K. Siam の中での全村的組織としての相互扶助会が自治の上で果す役割は、目には見えないながらも案外大きいのではないかと思われる。同じ村に居住しても共同意識というか同属意識というかそのようなものが弱い村人の中で、場合によっては除名もありうる。規約にあるこの会の会員は、当然、共同意識をもった人々であろう。会への所属意識をもった人々にちがいないのである。いったい、自治の根本は、所属意識ないし共同意識を持つことにあるといえよう。治めるべき「自分」がないところに自治はありようがない。集団があたかも自分というものに一体性があるように、一体性あるものにならなければ、そこに、自らを治めようとする意識が芽生えるはずはないのである。誇張的になるが、K. Siam は全体として一体性

ある個体とはいいい難い。そのように考えるとき相互扶助会の存在の意義が鮮明になってくるであろう。村人の饗応だけに役立っているのではなくて、村の自治のために実力を発揮しうる有力有志の人々に強い足場と心理的支えを提供している長い歴史をもった組織なのである。そこに相ていけいして現われている有志の中心に ketua kampung としての Penghulu がいる。何事も Penghulu が采配をふるが、必要に応じて意見を徴し、話合う村の有志がつねに手近⁹⁾にあり、主としてその会見・会合の場所はかれの私宅の高床下の広間である。

4 Imam について

相互扶助会に並んで重要な組織は Orang Sapuloh である。これは村の宗教面に関係する“10人委員会”といったものである。これにはそれぞれ次のような職名がついていて、正規には各職名に2人宛が位置することになっている。Imam (村人の結婚・離婚の申告の受け付), Penghulu Masjid (金曜日礼拝時の出欠その他の記録係), Bilal (祈りの先導), Khatib (政府送付の説教朗読), Siak (masjid での水汲み, 太鼓たたき)。現在 K. Siam では Penghulu Masjid が2名いるほかはみな1名宛で、計6人である。現在の数で十分間に合い、補充の要はないということであった。

Orang Sapuloh の中で最も重要な人は Imam である。その役目は、結婚・離婚の受け付のほか家庭争議の調停を行なう。政府ザカットの受けいれをするのもかれの任務である。宗教面では村内最高の地位にあり、村人から非常に尊敬されている。現在の Imam に会ってみると風采のあがらない小さい人であるが、いわゆる人格者という感じの人で、Pengkulu の次に位置する村の有志であるといつてよい。40年前祖父につれられてメッカ巡礼に行っている。親戚14人の団体であった。出発時の餞送会に集った人の数はおおよそ150人であった。これらのことは、彼が有力家系の出であることを示している。かれ以外の Orang Sapuloh 所属の人がみな有力有志というのではないが、Imam だけは別格のようである。

Gullick が1870年代の Imam について次のようにのべている。Pengkulu (こんにちの ketua kampung) は村の専制君主ではなく、村有志の内の最高者であるというにすぎなく、村の有力者層の中でかれより重要な人は Imam であった。Imam は通例村の有力家系の出身であった。Perak 王国における1870年代の政治史においては Imam は村内の重要人物となっていて、しばしば Pengkulu の顧問として政治的役割を果した¹⁰⁾、と。

このような Imam の地位は現在の K. Siam の Imam においてもほぼ同様である。金曜日

9) マレー人の高床家屋の床下は、貧しい家では風通しのよい地面があるのみであるが、富裕になるほどそこが利用され、まれにコンクリートの部屋になっている。Pengkulu の家のそこは、テーブルをおいたりっぱな部屋で、来客は庭先からそこへ直行することができるようになっている。

10) J. M. Gullick, *Indigenous Political Systems of Western Malaya*, 1958, p. 36.

ごとのモスクにおける村民の礼拝集会でかれは上座にあって主宰する。村の非宗教的俗事について礼拝後相談が行なわれることがあり、かれは村の有力者の先頭に立ち、村長の相談役になる。その他モスク外での俗事に関する相談でも同様である。村の宗教面で最高権威者であると同時に、結婚・離婚をうけつけ、葬式を主宰し、村民の政府ザカットを受け付け換金して政府に金納し、家庭争議を仲裁するなど、その任務は宗教面にかぎられているのではない。単なる司祭の立場にある人ではないのである。その教・俗両面にわたる役割を見ると、Gullick が Penghulu との比較においてのべたことは大体ここでも肯定される。ただしこんにち Penghulu は mukim の長であるから、政府の mukim や kampong に対するかかわりの度合いが増すにつれ、かれの地位は一層高くなるのであるから、こんにち Imam が Penghulu よりも重要人物であるとはいえない。そのような考えをこんにちの村人がもっているとはとうていいいえない。しかしながら、かれが宗教的・道徳的村の秩序の維持者ないし目付役といった立場にあることを見落してはならない。

Imam 以外の Orang Sapuloh の人々が村の自治面で重要な地位にあるとはかならずしもいえないが、村の有志であることに変わりはない。ことに Penghulu Masjid のごときは村内最高富者、したがって有力有志の1人である。村人からえらばれ、政府の承認を受けてその地位につくかれらは、村ではやはり権威ある人である。¹¹⁾80才の現 Bilal に会い、Bilal の次の継承者は誰かときいたとき、大体長男になろうといったが、それをきいた傍の長男はあきらかに誇らしげであった。

こうして、古く伝統的な組織としては Imam を軸とした Orang Sapuloh をめぐる有志の集りがあり、いまひとつは Pinggan Mangkok なる組織がある。村の自治は Penghulu 中心の有志らの informal な合議体によっているといえるが、その中に分けいってみると、このような二つの組織が抽出されるのである。この組織の一方は教的、他方は俗的と截分して考えることのできないことは上述したことからあきらかだ、Imam を中心の村有志の集りは教的性格がつよいといえるが、相互扶助会の方も教的側面がまったくないとはいえないのである。10人の運営委員会を設け年1回集会をもつ K. Siam dua のこの会の責任者が次のようにのべている。

「Pinggan Mangkok を持つことは村人の一致のためによい。そして、これは会員に gotong royong [助けあい] の精神がなければ成り立ちません。その精神は宗教と関係がありません。自分は犠牲的に30年にわたって世話をしています。饗応主宰は骨の折れる仕事です。」

しかし、ごく直截ないい方をすれば、教的組織と俗的組織という車の両輪が村意識の微弱な

11) 宗教師 (religious teacher) [後出] らともにかれらも村人から伝統的ザカットを受ける立場にある尊敬される人々である。

K. Siam の人々をのせてうごいているのである。もっと端的に言えば K. Siam の住民をひっぱっているのは Penghulu と Imam だということである。Pengkulu は mukim の Penghulu である。たまたまこの村に居住しているから、いきおい村の ketua になっている形である。したがって、権力のつよいこの ketua は Imam よりはより高い地位にあるものとして村人からは対されることになる。事実そのように観察される。K. Siamでの最高権威は、Pengkulu mukim であってしかも村の ketua という格のその人物にあるのである。何よりもその住む家の構えがそのことの象徴である。この ketua kampung と Imam とは同列にあるとはいえない。それは Penghulu mukim がこの村に住んでいるという特殊性からきている。そうではない他の kampung にあっては、ketua kampung と Imam とは、ほぼ同列の車の両輪として村の生活の秩序を支えているのではないかと思われる。

K. Siam においては、上記したように、農民組合がはじまり、成人学級が開かれ、料理講習会があり、その他 mukim 内の他の村 Kubang Jawi に信用組合がおかれて金融面に便宜をうる可能性が出てきたとか、農業技術に関する役人が常住しているなど新しい前進が見られる。それらは最近新しくはじまったことばかりである。自治の仕方の大筋に変化はない。いったいそれら新しい動きがまったくなかった以前の村はどういう状態だったのであろうか。少し過去をふりかえってみよう。

5 村 の 変 化

K. Siam 村の過去の歴史を正確詳細に知ることは困難である。かいた記録はないし、第一村の故老には村史への関心がうすいと感じられた。それでも僅かながら幾人かの人が記憶の中からとりだしてくれた。次にそれらをかきつづってみる。

バス開通前は他との交通がはなはだ不便であった。村を貫流する川の堤は低く、しばしば宅地に水が浸入し、水はけは非常にわるかった。家を建てることも容易でなかった。胸まで水につかって往来しなければならないことが頻繁にあった。(堤が不完全であつたらそういう状態になったであろうということは筆者にもよく想像がつく。というのは、雨期には多くの家に通ずる道は泥土と化してしまうのである。) こういう状態を思い起して「いまはよくなったのです」と語る人のその記憶は、そんなに昔のことではなかったという感じである。そのことは下記のことからもいえる。

K. Siam に小学校ができたのは1937年で、生徒は Kubang Jawi や Padang Lalang の村からもきた。当初生徒数は50人であった。ところが雨期には道が水をかぶって通れず、生徒は通学ができず、次第に減り、5年後には閉鎖してしまつた。そしていまの Alor Jangus の川側に再建されて2年つづき、それが現在の Penghulu の家の近くに移され、1956年までつづいた。現在の村の入口にりっぱな校舎が建つたのが1957年で、それはマラヤ連邦国家の誕生の年

であった。

青年は昔は髪をのぼし、サロンを着用し、宗教心はつよく、逆行する者は1人もいなかった。いまはかなり変化した。たとえば出費多い饗応の催しに反対する青年がいる。年寄り層にたてつくのもいる。「そのような変化はなぜ生じたのか」と問えば、返事は「それは時勢です」と答えた。こんにちの時勢による変化だという意味であるから、そのような変化は最近の現象といっているのである。

子弟を町の English school¹²⁾ で学ばせるとき、年寄りはキリスト教に改宗させられるぞといって怖れたものである。現在、銀行・郵便局への預金のことを知らない人は少ない。昨年からは tabong haji なる制度がはじまり、メッカ巡礼のため定期積立をする制度ができた。しかし契約するマレー人は少ない。「慣習を殺すより子供を殺せ」(Biar mati anak, jangan mati adat) と昔はいい、いまでもこれを学校で教えるけれども、しかし不経済な adat は廃した方がよいという意見の人も現われるようになった。相互扶助会の世話人は若い人になるのがよい。しかし昔はそんなことはあり得ないことだった。昔は年寄りの世話人がひとり決めしたものだ。はっきりした分業はなかった。新しい形での gotong royong になったといえる。これは進歩である。

政府ザカットの政策は10年ぐらい前からはじまったが、3年前から厳格になった。急にきびしくすると人はついていけないものだ。“急に雨がふると、人は小屋ににげこむのだ。” どういう政策でも急激に強制してはいけない。化学肥料の使用は8年ほど前からである。政府の肥料政策の動機はよいが、しんとうしない。しんとうしたらよいと思う。

以上人々の記憶の断片を記したが、これを見ると、村における新しい変化と思われるものはすべて近々10年この方のことであることが知られる。よどんだように動かなかった村の生活体制が近年になって急に動揺をはじめたという感じがする。しかし、その動揺ないし変化たるやそれほど深刻なものではない。時勢の進展にともないおのずからある程度の変化が村の生活に生じつつあるといえる程度のものである。K. Siam の人々の生活はなお大体において昔のままであるといえる。そして、先に見た自治のあり方は、その昔のままの村の生活に固く結びついたものなのである。

6 自治と倫理と宗教

セレベスのマカサル族では、酋長は自らを天来の起原をもつものと信じ、自分は唯一の支配者であり、専制的になってもよい権利があると考えている。部族の一般人も酋長の前には自分らは鶏に等しい存在と考えている。酋長による完全な専制政治が行なわれているその土台には

12) マレー語、英語で全科目を教える中学校を、それぞれ Malay school, English school というが、English school にはキリスト教会経営のものがマラヤでは多い。English school に行くマレー人の生徒は多いが、キリスト教に改宗する者はほとんどないであろう。

このような人々の信念があるのである。身分の高い者に対しては法の力を発揮させることができない。したがって、紛議が生じたときまず相手の身分の高低をたしかめることが必要であった。このようなことはオランダ人の統治がはじまってからも15年ぐらいはつづいたという。¹³⁾ セレベスの中央部に住むトラジャ族ではおたがい村人は家族員と考えられ、人から物を乞われたときに断らない慣習さえできあがっている。指導者と一般住民との間には慣習にもとづくおだやかな結びつきがあって、指導者に専制的なところが少しもない。奴隷制はあるが奴隷が苛酷にあつかわれることもまったくない。政治は話し合いのもとで行なわれ、女といえども男同様の発言権をもっている。¹⁴⁾ このように自治の様式を決定する、否、少なくともそれと対応するものに一定の人間観というものがある。マカサル族では住民間に不平等を認める考え方があり、トラジャ族では人間平等の考え方があり、それら考え方のちがいに応じて自治の形式にもちがいがあるのである。その点 K. Siam 村についてはどうであろうか。

Penghulu の権力が強いことはまちがいない。一切の問題はかれが解決するという表現をなした人がいたほどである。しかし実際はできるだけ民意を問うようにつとめている。地方自治の末端の役人として住民と上役との中間に立って苦慮し、明確に住民側に立つことを明示できないことはあるけれども、そのことは人々の意志を無視していることを意味しはしない。村の問題解決において、人選において、戸主なる男子を集めてかれらの挙手によって決裁している。前にのべたように、Penghulu の相談相手である村の有志はおのずからきまっでいて、かれはかれらの意見を徴してことを運び、必要とあらば村民を集めて意見をきいている。貧富や地位の差によって自然に発言権の大小はきまってくるが、住民不平等の観念があるわけではない。むしろ Allah のもと人間は平等であり、富者は貧者に施しをすべしという考えこそ一般化しているのである。かれらだけの社会におけるかれらにあっては、慣習にしたがい人間平等が実践されているばかりでなく、理念としてもそうであるから、かれらには人間平等の倫理があるということができ、かれらにおける自治をささえる心理は倫理的性格がつよいということが出来る。そしてその倫理は宗教的に基礎づけられたものである。なぜそのようにいうことができるのか。次に、かれらの宗教的側面をのべてみることにする。

子供に対する宗教教育が熱心である例として1人の親について記そう。かれは次のように語った。

「自分は12才のときから祈りをはじめ、子供にもそのようにしつけている。子供は3人いる(13才、5才、8カ月)。善良な生活を送るようにという目的で宗教を教えている。そのよ

13) J. A. F. Schut, "De Makassaren en Boegineezen," J. C. van Eerde, *De volken van Nederlandsch-Indië*, vol. I, 296—319.

14) N. Adriani, "De Bewoners van Midden-Celebes," *ibid.*, 1—32.

うに教えたら、盗みとかその他の悪事はしなくなる。前妻との子供が別に3人いて、ここから50哩はなれたところに住んでいる。1人は English school, 1人は Malay school, 1人は農業に従事している。これらの子供の宗教教育にも自分は注意している。年1回はここにくる。手紙でもよくいってきかせる。〔もし English school に行っている子供さんがキリスト教に改宗しようとするのでしたらどうしますとの問いに対して〕それは自分は決して許しません。〕

K. Siam には村の児童だけのための私設の宗教塾 (madrasah) が三つある。一つはごく小さいものであるが、他の二つは大きく、7才から14才までの児童を30人ないし50人ほど教えている。両方とも男女1組宛である。ひとつは最近隣村からここへ移したもので、他は14年前から開いている。この二つは古いものではないが、これらがなかった時代にも宗教教育の私塾が絶えたことはないのである。よほど貧しいか不熱心な親でもないかぎり、子供らは学校から帰宅すると、よい着物に着換えて塾にでかけるのである。少年時代をこうして過し、モスクでの金曜日毎の礼拝に行き、家では日々の祈りを唱えるなどのことをよく守って育つ子供らが、成人したときに大体において信心深くなるのは当然である。連続3度以上金曜日礼拝に欠席する者を、州政府の宗教局に Penghulu Masjid がとどけるということになっていて、上からの強制があるけれども、やはり村人は全体として信仰厚いということができる。断食の月に村人が断食をよく守る有様はおどろくばかりであった。12才の児童からよく守っている。暑熱の土地で日の出から日没まで完全に飲食を断つことは容易なことではないが、実によく守っている。信仰がなければできないことではないであろう。筆者にとってこの観察は貴重であった。ある青年教師が次のように語ったこともある。

「映画館にはいるときにモスクから流れてくる祈りの声をきくときには、ちょっと悪事をしようとしているような気持になる。ときには涙が出そうになる。家から遠く離れた異郷にあるときにはとくにそうだ。」

「宗教の中のある部分には変えなければならぬものがある。一部の人に見られるような、音楽はいけない、女の人の顔を見てはならないというほどの保守主義は自分にとらない。そういうのは変えるべきだ。豚肉を食べてもよいなどという変化はとても認めることはできない。コーランにしたがって豚肉を食べないのであるから。」

断食をする意味を問うたときに同教師は「富者と貧者がともに同じ苦しみをせめて年に一度だけでも味うことはよいことだ」と答えた。これらのことばによってかれが信心深いといえることはあきらかであるし、断食の月における敬虔な態度もそのことを明示していると筆者は思った。そしてこれらのことは、かれがこの村でとくに信心深い人であることを表わしているのでは決してないのである。Imam が「青年らは信仰の点で問題はない。あまり金曜礼拝に来ないときには説諭を加えることもあるが、信仰上に問題はありません」といったことばは

そのまま信じてよいと思う。

政府ザカットを完納するよう村人に勧告する 目的で 政府役人が村にきたことがあった。金曜日礼拝後のモスクの中で、役人は長々と回教信仰の正しさについて熱弁をふるった。そしてザカットの納入を勧めた。すると途端に、おとなしく傾聴していた村人の中の論客が、語気鋭くそれに抗弁したのである。宗教教義に従えば政府ザカットを納める根拠はないというのであった。村内で貧者にあたえるザカットは正当なものであり、予言者の言に従ってなすべき義務と考え、これは自発的によく守っている。米の収穫後と断食あけに米を貧者や madrasah の religious teachers に運ぶ様を見てそのようにいうことができる。椰子の実を猿にとらせて賃取りをし、それで生活している貧しい男の家を訪ねていたとき、物乞いの人が出てきた。そのときあたえた米の量は予想外に多かった。ザカットの精神は徹底しているのである。

このようであるから「道德上の忠告はすべて宗教につながります」「宗教のおかげで道德は守られるのです」というようなことばが村人の口から出てきたのはきわめて当然のことであったと思われる。すなわち、かれらの倫理意識のうらには宗教信仰が息吹いているのである。人間平等の理念をもって回教信仰に生きる村人の中で、専制的自治の形式はとられないのである。

7 む す び

親戚や隣家の関係をこえて村としての一体性の意識が弱い村で、村全体としての自治をさきえている大きな柱は ketua kampung と Imam であった。前者は K. Siam では同時に Penghulu Mukim であった。この ketua は相談相手として幾人かの有力有志をつねに手近にもっている観があった。村生活と回教はきってもきれない関係にあり、したがって Imam の権威は高く、村では ketua に次ぐ有力有志でもあった。少数有志の協力があってわりあい民主主義的自治の形式がとられているのは、その土台に回教信仰があるからでもあると考えられた。本論のあらすじはこのようなことであった。

こういうような自治の形式は、州や国のレベルにおいても根本原理的なものとして一貫して見られ、それを思うと、マラヤはやはり Tanah Melayu であろうとする強いひとつの見えない意志によってひっぱられているような感じがする。英国のマラヤ支配は、第二次大戦直後のことは別として、当初からその意志に抗しない政策をとりつづけていたのである。